

2019. 7

7

326号 7/15

もえぎ

勝又ハツイさん書

MOEGI



医療法人社団萌気会

在宅療養支援診療所

(三日町)

在宅療養支援有床診療所

(浦佐)

もくじ

家とは何か、ふるさととは何か	2
『新潟いのちの物語をつむぐ会』第4回魚沼例会	3
漫画 黒岩卓夫一代記	4
僧侶有沢昱由画伯の世界	5
萌気会・桐鈴会・株式会社共栄堂 第9回合同研究発表会	6
第14回日本訪問リハビリテーション協会 学術大会 in にいがた	7
うちの利用者さん&家族からの文	8



7月28日(日) びやもん茶房
(10時~12時)

地域医療研修

8月1日(木)~8月31日(土)

東京慈恵会医科大学附属病院研修医

浦佐診療所 ☎025-777-5222
三日町診療所 ☎025-778-0088
あやめ診療所 ☎025-780-4377

表紙写真撮影地:新潟県見附市 水道山公園

寄稿

家とは何か ふるさととは何か

福祉法人桐鈴会 理事長

医療法人萌気会 理事

北大路 秩子



6月16日、新潟いのちの物語をつむぐ会第4回例会だった。会場は浦佐の毘沙門様、普光寺。5分くらい前に行ったらもう一杯で、残っていたのは後の席2つだけだった。

初めに普光寺の住職樺沢賢正さんが「お勤めするのに拍手されたのは初めて」と言いながら登場し、木魚を叩きながらお勤めをし、残った5分位でお寺の柱の傷の意味を語った。150年前に建てられたお寺。そのころお上から俵約令がでていたので、新しくないことをアピールするために柱に傷をつけたとのこと。

話題提供の卓夫は、まず亭主関白のねたきりのじいちゃんが、自分で建てた家に居ても自分の家でなくなり、自分の家へ連れて行けというようになった例。妻が亡くなり、近所の人が来なくなり、長男が亡くなって、外の親族が来なくなり、自分を包む人が居なくなってしまい、「自分の家」ではなくなった。

つぎに小規模多機能の利用者が、泊りも多くなる過程で、たまには家に帰らなければと家との関係が逆転する。さらにグループホーム入居の認知力に低下のあるばあちゃんのなかに「帰りたい家」とは、自分の生涯で最も楽しかった思い出に帰ることがわかった。

意識化された家は、心の家、父母や故郷や祖国へと広がり、さらに空間だけでなく時間的にも「あの世」へ通路を作る力があるのではと語った。

その例証として「故郷」ふるさとの歌。1番は山川（自然）、2番は父母、3番は志（意識）を歌い、全てが「心の家」に通じているのでは。

2部ではマクレラン牧子さんがフルート、鬼頭啓子さんがキーボード、高波礼子さんの歌でこの「ふるさと」も歌ってもらった。皆心がひとつになったのでは。御三人に心から感謝！

3部では7グループに分かれて、7～8人で家について語りあった。私が属していたグループには医師2人、学生1人にもえぎ職員だった。

若い人とは家のイメージがずいぶん違うと感じた。外科医の中塚さんは「病院の中でも家のようにしている。病院食が食べられなくなれば家から持ってきたものを食べてもらおうし、経管はなるべくつけないようにしている。」という。

夕方からの懇親会も普光寺で行われ、料理は萌気会地蔵の湯職員の手づくりだった（感謝）。この会の1人1言の中で「松之山では近所も皆家族みたいで、全体が家族みたいだ・・・」

また木曾さん（長永寺住職）は、「妻が亡くなったとか誰が亡くなったとかいうが、なくなるものがある。それが仏様だ。仏さまが我々を見守ってくれている。」

私にとってはこの例会でとても新鮮なものを受取ることができた。

卓夫はこの日のためにずいぶんエネルギーを使って準備していた。昨日は早く寝て、今日は寝坊して回復したようだった。



「新潟いのちの物語をつむぐ会」 第4回 魚沼例会

新潟いのちの物語をつむぐ会魚沼例会 実行委員長

萌気会 事務局次長 上村 光男



上村実行委員長

樺澤住職

2019年6月16日、「新潟いのちの物語をつむぐ会」第4回例会が南魚沼市浦佐の普光寺様を会場に行われました。当日は小雨の降る中でしたが、沢山の方々に参加して頂きました。130名の方が参加され、後半の小グループ談義にも53名の方が参加して頂きました。大変ありがとうございました。この会の簡単な概略は昭和59年12月、故日野原重明先生を代表世話人とし東京を主会場に「医療と宗教を考える会」が主に医療界に向けて6年間の活動がありました。黒岩卓夫先生はその時から参加されております。医療従事者と宗教家がそれぞれの立場から生と死を考え、市民に向かって語りあえるスタイルとなり「医療の心を考える会」として、平成3年から医療・生死をメインテーマに、新潟市と長岡市で交互に講演会が開催され、一般市民に啓蒙する活動が行われていました。その後パート2として、平成8年から黒岩卓夫先生が代表となり日本初の仏教ホスピスであるビハラーが長岡西病院に誕生したことを契機に、ビハラー病棟の取組みやターミナルケア等の啓蒙活動を行って来ました。このころから現在の形でも「法話を盛り込み、可能な限り開催地を寺院とする」がコンセプトになりました。平成23年からパート3として、人間の生死に関わる諸問題をより深化させた議論を行う場としての世話人会の開催と、広く啓蒙的な活動を行って来ました。平成29年7月に一旦25年間の活動を閉じ、その活動は平成29年12月2日に現在の「新潟いのちの物語をつむぐ会」へと受け継がれました。上下関係や、専門性もなく自由な話し合いの場がこの「新潟いのちの物語をつむぐ会」にはあります。例会の開催は出来る限りお寺を会場にしています。

この例会の良い所の一つは、その時々々の例会でテーマは違いますが、テーマについて気軽に「自分の物語を語る」グループ談義の場があると言う事です。職業の違いや地位など関係なく、気軽に「自分の物語を語る」場になっています。そこではそれぞれが主役です。ここでは他者の発言を否定したりはしません。例会開催時は必ずグループ談義があるので、よろしかったら参加をお願いします。お互いが持つ「物語」に耳を傾ける。それは、その後においても必ず何かの役に立つと思います。「新潟いのちの物語をつむぐ会」の会員に是非なって頂ければと思います。



それぞれの願う「家」 ～HouseとHome～

第三部のグループセッションで普光寺住職の樺澤氏、薬剤師、リハビリ職、介護職、看護学生、介護や看取りの経験をした市民の方という多彩なメンバーと「家」について語り合いました。

生れた家に住んでいるのに「ここは家じゃない」という母、「家に帰る」と元勤め先に向かう男性、緩和ケア病棟で安心して最期を迎えられる末期がんの方…。

「帰りたい」と望む「家」とは何なのでしょう。私たちは「家とは安心できる居場所」「一番愛されていた場所」であり、それは現実に存在する建物(House)ではなく、幸せであった思い出(Home)なのだという結論に至りました。また家族だけでなく友人や地域、仕事の仲間等「安心できる人や社会との繋がり」が大切な要素に思われました。

最後の20分間はご家族を看取られた方々からお話を聴きました。

お話を聴きながら家族としてどんな看取りをしたかったか、自分ならどう看取られたいかという話し合いができました。家族には「本人に苦しい思いをさせたくない」という強い思いがあります。

本人にはどんな最期を迎えたいか、一人一人に様々な想いや願いがあると思います。

様々な状況の中で幸運にも願いが叶うことと、自分で選ぶことの叶わない現実があると思います。最期を迎える場所として自宅、施設、病院等のどこがベストかはcase by caseです。

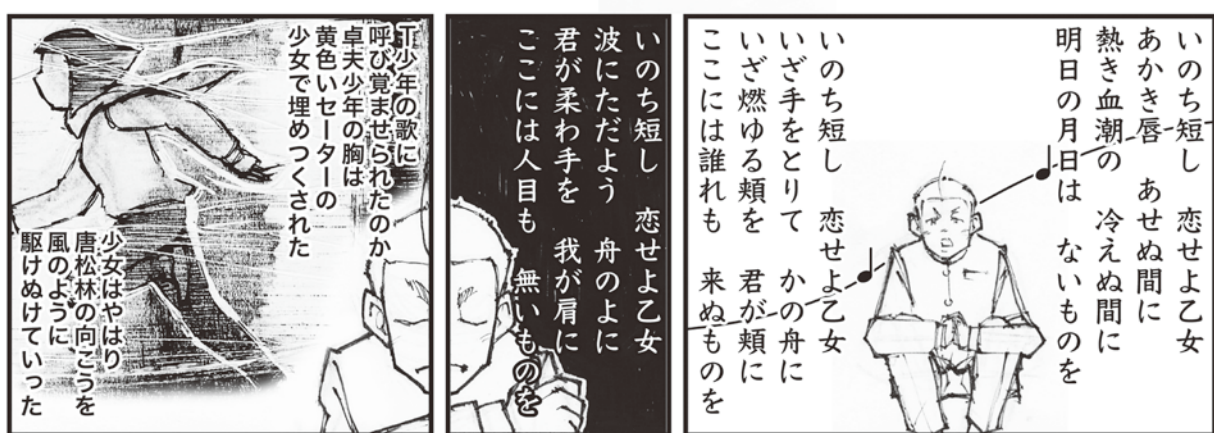
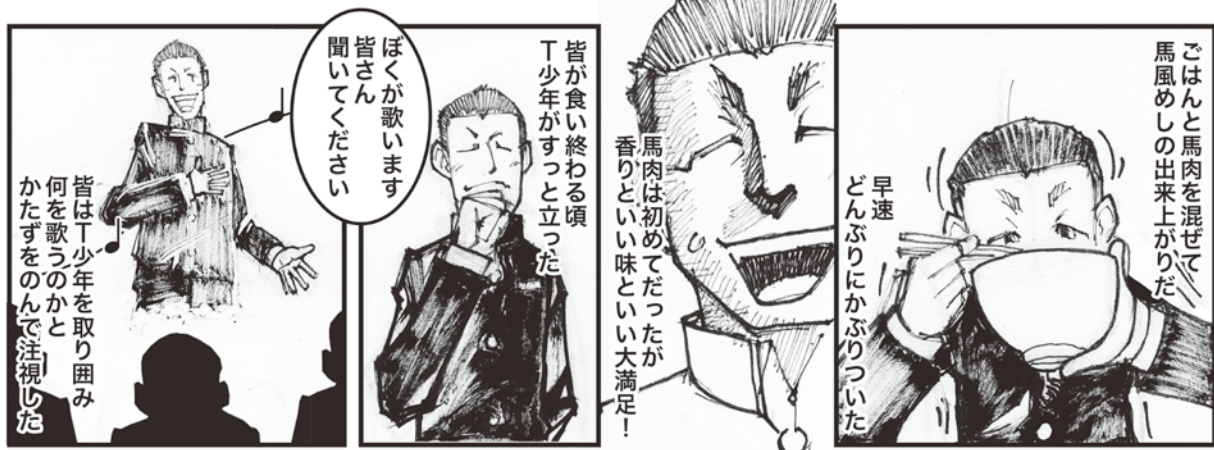
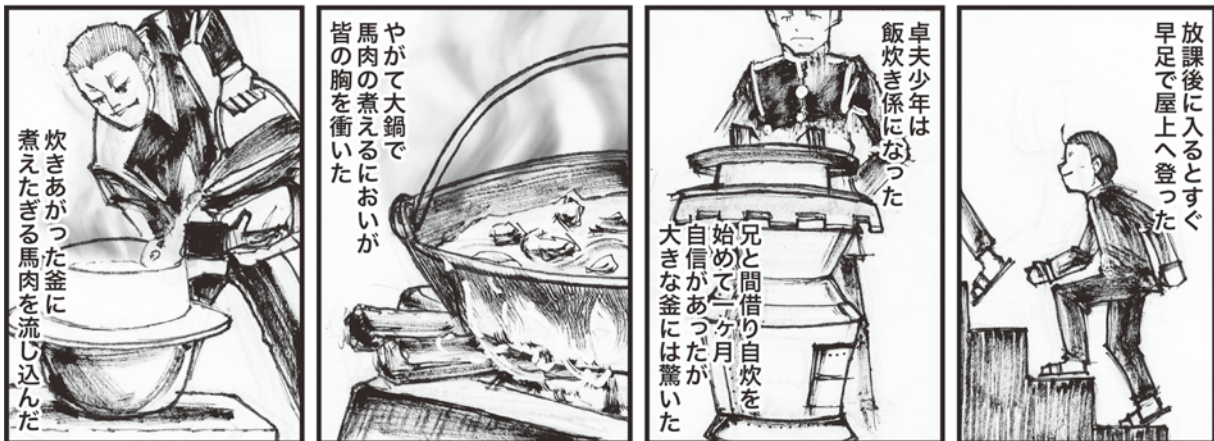
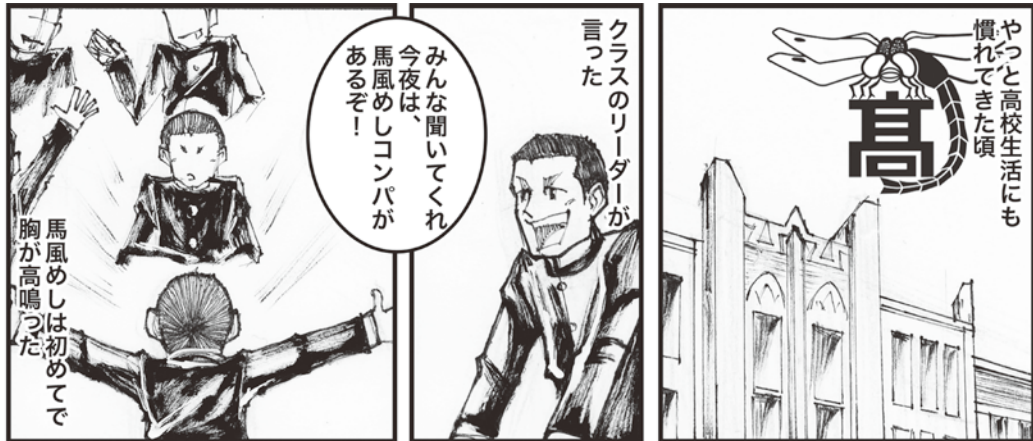
樺澤氏からの「自分が看取られる場所、看取ってもらえる場所を“家”と呼びたい」「孤独はいいけれど孤立は嫌ですね」とのお話が印象的でした。私は自分の家族や自分自身のこととして、もっと深く考えていきたいと思いました。

地位や年齢、生活する場の異なる人同士で実体験を話し合い、繊細な心の内を聴かせていただき、とても貴重な経験をさせていただきました。

黒岩理事長をはじめ役員、会員の皆様ありがとうございました。実行委員の方々、お疲れ様でした。

第二十九話

ゴンドラの唄



卓夫少年は「山猿ランプ少年」から足を洗えるでしょうか。
入学以来毎日がカルチャーショックでした。1200人の生徒の中の1人として精いっぱいでした。
一方、屋上での馬風めしコンパなどで少しずつ友だちもできてきました。
そして青春の心も少しずつふくらんできました。松本では昔から馬肉をよく食べました。



池田記念美術館にて、5月25日からじまった有沢昱由展、この展覧会を特に地域の若い人たちから見てもらいたいとの願いが叶って、近くにある北里大学保健衛生専門学院からは保健科と栄養科の学生約250名と、大和中学校の全校生徒が30～40人に分けて来ていただいた。

美術館から説明後、桐鈴会・萌気会についての説明を行い、自由に見てもらった。

僧侶有沢昱由画伯の世界

社会福祉法人桐鈴会20周年記念展覧会・医療法人社団萌気会共催
芸術・医学・宗教の融合(有沢昱由氏の創作上のコンセプト)

《ホームメディケーション》

😊 絵に書かれている人のほとんどの表情は怖かったです。ですが、この絵は医者と患者の両方が少し笑顔だったような気がします。また正確に描かれていたため、その時の情景がとても考えやすかったからです。

😊 仕事に愛をもったのぞんでいたのがよく分かった。

😊 在宅医療をテーマにした絵で題材が他のものよりも身近に感じ、細かい所まで描いてあって、繊細な感じがした。

大和中学校生徒のコメント (印象に残った作品と理由)



《砂時計》

😊 ガラスの透明感や砂の質感がリアルできれいでした。

😊 僕は昔、小さい頃によく砂時計で遊んでいてそれを思い出したから。

😊 自分が見た絵で一番不思議な絵だったから印象に残りました。この絵を見るとなぜ有沢昱由さんは、この風景が暗くて共栓瓶が並べてあるのか少しづつ分かっている、病院で使う道具で悲しいことがあったのかと自分は思いました。

皆さん、伊東深水を御存知ですか。美人画としては最も有名な上村松園や鐫木清方に並び称される画家です。川瀬巴水は深水と清方の兄弟弟子ですが、深水は美人画に走り、巴水は浮世絵を継ぐ版画家として有名です。衰退した日本の浮世絵版画を復興すべく吉田博らとともに時代の流れに沿った新版画家であり、近代風景版画の第一人者です。

またアメリカの鑑定家ロバート・ミュラーの紹介によって、海外では評価が高く、浮世絵師の葛飾北斎・歌川広重と並び称される作家です。

今、二日町ギャラリーの作品は巴水の特徴ある雪や夜の情緒あるものです。近いうちに作品の入替えがありますのでぜひ見てみてください。



かわせ はすい
川瀬巴水(一八八三年～一九五二年)
日本の大正・昭和期の浮世絵師・版画家

萌気会・桐鈴会・株式会社共栄堂 第9回合同研究発表会

研究の成果を全職員が共有し、サービスの質の向上に繋げることを目的に三社合同で「研究発表会」を開催しています。具体的な議題から実践、発表を繰り返すことにより、医療・介護業界の発展を目指し試行錯誤しながら積み上げた一つの実践が、患者様・利用者様、また全国で頑張っておられる医療・介護従事者のお役に立てればと思っております。

第9回を迎えた今回の発表会は、例年とは異なり平日の午後7時からの開催となりました。業務終了後の遅い時間にもかかわらず、約150名の職員が参加し、様々なテーマの研究・10演題の発表が行われました。医師も含めた職員による質疑応答は、とても有意義なものとなりました。内容については新たなアプローチ方法による取り組みや業務改善に関することなど様々あり、患者様・利用者様により良いサービス提供のため、熱心に研究された発表でした。今回の研究発表を基に、今後の医療・介護のサービスの質の向上に繋げていきたいと思います。

〈事務局 田中伊織〉

NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク
第25回全国の集いin東京2019

地域医療研究会全国大会in東京2019合同大会

萌気会の代表として発表します

○ 職業別！あなたは何歩歩いていますか？

～萌気会Ver.～

萌気園二日町診療所

訪問リハビリテーション「りらいふ」

阿部友恵

萌気園通所リハビリセンター浦佐

小澤 萌

○ 「パワーポイント回想法により認知症ケア」

萌気園老人ホーム「すみれ草」

川部伊佐夫

○ 「お出かけリハ報告」

萌気園通所リハビリセンター浦佐

大谷 靖子

笠原 翼

○ コミュニケーション能力向上への取り組み

～人狼を使ったコミュニケーション～

萌気園大和通所介護「地蔵の湯」

桑原 哲也

パワーポイント回想法による 認知症ケア

萌気園老人ホーム「すみれ草」

施設長 川部 伊佐夫



昨年の合同発表会に続いて研究発表の機会をいただき、認知症ケアの実践報告をしました。なぜ認知症なのか。それは認知症ケアや予防こそが待ったなしで取り組むべき課題であると考えているからです。

認知症ケアのポイントを3点に絞りました。

- ①「五感から脳に刺激を与える」五感とは視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚であり、五感から脳に直結して刺激を与えることが認知症ケアにつながる。
- ②「笑いの持つ効果について」笑いの持つ効果は、副作用のない薬であり、免疫作用効果がある。
- ③「人生の物語を通して心に刺激を与える」ある利用者の人生を通して、回想法を実施して人生を振り返ってもらう。

以上の3点から事業所での取り組みを述べたものです。

特に人生の物語を思い出す、「人生の物語回想法」（私が勝手に名付けた）を通して、私自身の利用者に対する尊敬の念が湧きあがりました。それにより介護ケアの質が変わったと感じました。

介護の仕事は、人生の物語の最終章に向き合える貴重な体験ができる仕事であると思えてなりません。9月におこなわれるNPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク第25回全国の集いin東京2019、地域医療研究会全国大会in東京2019合同大会でも、萌気会の代表としてしっかり発表してまいります。

第14回日本訪問リハビリテーション協会 学術大会inにいがた

萌気園二日町診療所
訪問リハビリテーション

りらいふ

作業療法士・認定訪問療法士 木暮 拓美



本大会は、去る6月29日～30日、新潟市の朱鷺メッセで開催されました。新潟市で訪問リハビリテーション（以下訪問リハと略す）に従事する療法士の皆様が中心になり、約1年半前から開催に向けて準備をされていました。私は準備中にシンポジウムのお話を頂き、少しでも大会のお役に立てたらと思いシンポジストを引き受けました。

シンポジウムは「ご当地訪問リハビリテーションー地域特性を活かそうー」と題して、大都市（東京都足立区）、山間部・雪国（新潟県）、南国（沖縄県）と3つのそれぞれ異なる地域からシンポジストが登壇しました。大都市では人口が多いものの、他県から働きに出てきて長年住んでいる方も多く、近所付き合いが希薄になりつつあったり、介護保険下の事業所が多く行政との関りに苦勞されているお話がありました。また、島の多い沖縄県では船に乗って島へ訪問リハに出かけること、また、台風の影響により停電することもしばしばあり、人工呼吸器など電気が必要な医療機器の非常時の対応についてもレクチャーしているお話がありました。また、印象的であったことは沖縄の方々の人との繋がり、助け合いの精神が日常的に当たり前にあり、包括ケアシステムで示されている「互助」が自然と存在する事でした。



私は雪の多い風景や自然豊かな環境、家屋の特徴、人柄を交えて訪問リハの実状をお伝えしました。雪の多い風景に驚かれる方もいれば、同じような環境の中で同じような問題や課題を抱え奮闘している方々と語り合える機会となりました。課題の一つとして、冬季間の活動量の低下により体力・筋力の低下が生じ転びやすくなることがあります。雪で閉ざされ屋外に出る機会が少なくなる中で、どのようなサービス提供が出来るのかが検討課題です。

地域の特徴はそれぞれ異なりますが共通して感じたことは、やはり「ひとりひとり」の慣れ親しんできた習慣や人との繋がり方・かわり方、生活環境などのライフスタイルを理解し支援を考えていくことでした。

今回はポスター発表も行い、全国各地で訪問リハに従事する療法士の方々との交流はとても有意義な時間となりました。また、働く原動力ともなりました。素晴らしい大会に参加できたことをありがたく感じております。

萌気会

夏祭り

浦佐認定こども園 **7月26日(金)**

18:30～20:30 中庭とホール

さくり温泉健康館 **8月4日(日)**

10:00～14:00 さくり温泉健康館

駐車場

萌気園 **8月10日(土)**

17:45～20:00 萌気園二日町診療所

特設会場

うちの利用者さん

渡辺 キミ様

(コム・ソフィ&ナース利用者)



「渡辺さんは、いつもお元気ですが、どちらの生まれですか？」

「五泉市だよ。」

「五泉市から六日町へ？すごい！ずいぶん遠い所からお嫁に来られたのですね。」

「そうかな？(笑)」

「そんな遠くから嫁に連れて来たのですから、旦那様はきっとキミさんにもの凄く惚れていたのでしょうね！」

「そんな訳ないでしょ。」(すごく照れ笑いされる。)

「若い頃は、お仕事何されていたのですか？」

「色々したわよ！」

「色々とは？」

「内緒！」(と、意味深な笑顔でかわされる職員。)

「コム・ソフィ&ナースは、楽しいですか？」

「楽しいわよ！皆さん職員さんが優しくしてくれるから！」

「ありがとうございます。」

これから元気で職員と一緒に冗談を言いながら、甘いお菓子をたくさん食べて笑顔いっぱい過ごしましょう。職員一同よろしく願います。

〈コム・ソフィ&ナース 中島〉

ふみ



日頃、母が大変お世話になっております。通所するようになってから一年半が過ぎました。

思うように動けず気がすまないようでしたが、職員の皆様の温かいサポートのおかげで楽しく通えるようになりました。

まずはじめに喜んだのは、ご飯が美味しいことでした。二ヶ月近く病院にいたからのリハビリでしたので、病院のご飯は食べられないと嘆いていたところ、リハビリに行ったらご飯が美味しかったと嬉しそうに話していました。そして、利用者様同士の会話ははずむようになり、お友達に会える楽しさも加わっていききました。

通所したばかりの時は、歩行器で歩くのがやっとでしたが、今は杖を使って歩けるようになってきました。最近では、他の利用者様に「お前さん、歩き方がよくなったね。」とほめられたと嬉しそうにしています。

杖を使って少し外出もできるようになった今後の目標は、孫達が「おばあちゃんと温泉に行きたい！」と言ってますので、それを叶えることです。杖を使って安定して歩けるように、ゆつくりリハビリできればありがたいと思います。

今後もお手数をおかけいたしますが、職員の皆様そして利用者の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

〈リハビリセンター浦佐利用者

豊野美枝子様ご家族〉

編集後記

☆編集後記を書いていいる今は梅雨の真っ只中。この新聞が皆さんに届いている頃は梅雨が明け本格的な夏を迎える頃だと思います。☆今号では「新湊のちの物語をつむぐ会」での様子をお届けしました。優しい雨の音が響き、若葉の緑が鮮やかに広がる浦佐の普光寺様で、沢山の方に集まり頂き、職業の違いや地位など関係なく、人と人が顔を合わせてお互いの「物語」に耳を傾ける有意義な時となりました。お楽しみ演奏会でのフルートの演奏や、美しい歌声が書面ではなかなかお伝えできないのが残念ですが、とても良い一日となりました。☆今月も、もえぎ新聞を最後までご覧いただいて有難うございます。ふるさとから大切な人へ届ける手紙を書くような気持ちでこの編集後記を書いていきます。☆これから萌気会の夏祭りも開催されます。また来月も様々な内容を皆様にお届けしたいと思います。〈い〉



普光寺